

## 食育講座 「親子で学ぼう Let's Cooking!!」

西九州大学短期大学部の西岡先生と学生さんの協力により、食育講座を開催しました。今年、「夏野菜を知ろう！」をテーマに・・・夏野菜を使ったカレー作りです！！  
“夏野菜カレー・お楽しみデザート“ を作りました



## ☆ なかよしミックス ☆

今月のなかよしミックスは、わらべうたのコーデイ研究会の富永先生を講師にお迎えして親子でわらべ歌を楽しみました。みんなの笑顔でいっぱいでした(\*^-^\*)



## 「シニアサロンぽぽら」に遊びにきませんか

子育て支援センター「さんこうぽぽら」では、月に1回地域の方におこし頂き楽しいひと時を過ごしています。今月は、保育園児の発表をご覧ください。奮ってご参加ください。

日時：9月13日(木) 10時から12時  
内容：「敬老の集い」保育園児との交流を楽しんで下さい  
場所：さんこう・ぽぽら  
電話でお申し込み下さい。 TEL 31-6877



## ♪ 育児相談・食育相談をしています♪

三光保育園及び三光幼稚園では、育児・食育相談を受け付けています。お気軽にお申し込み下さい。  
※毎月第3火曜日の14時～16時までは、西九大短大部教員による食育相談を行っています。  
事前にお電話でお申し込みの上、ご利用下さい。



永原学園地域子育て支援センター  
さんこう・ぽぽらだより  
2018年9月発行 第137号  
認定こども園 西九州大学附属三光保育園  
TEL:0952-31-6877

## 想像力は生きる力

猛暑と台風に頭を抱えた今年の夏でしたが、皆様お変わりなくお元気だったでしょうか？最近、夜の散歩をしていると、風が心地よく空も澄んで星がとてもきれいです。また、飼い主さんと一緒に散歩をするワンちゃんたちにも元気が戻ってきたように感じます。涼しい季節まであと少しのようですね。

さて、我々保育者は、7-8月にかけ様々な研修を受講しました。その中で保護者の方と一緒に受けた内田伸子先生のお話で、「想像力は生きる力」と題して、5官(感覚器官)を使った経験が豊かであるほど想像世界が豊かであり、こころ・あたま・からだの中で、見えない力が育っていて、想像は創造の泉となることを学びました。子ども達が自分で考えたことや思ったこと、推察したことを友達や大人と伝え合い、相手の話を聴く力が育っていくそうです。その子自身の進歩を認め、「3つのH=褒める、励ます、ひろげる」ことが、子どもの創造的想像力を育むそうです。他児と比べず、その子自身のいいところ、進歩を認めていきましょう！

秋は色々な体験ができる季節ですね。自然物を使って、おとぎの世界に親子で遊んでみることも楽しそうです。  
(三光保育園長)



## 9月の生活目標

・自分の事は自分でする

## 「なかよしミックス」に遊びにきませんか！

就園前までのお子様と保護者の方が一緒に参加して親子で楽しく遊ぶ集いの場です。

★第6回目の9月は、下記の日程で実施します。  
日時 9月12日(水)・14日(金) 10:00～12:00  
内容：砂遊びを楽しむ  
持って来るもの：着替え・帽子・コップ  
場所：地域子育て支援センター「さんこうぽぽら」  
※事前のお申し込みが必要です。  
※3日(月)9:30より受付(平日9:30～17:00まで)  
いずれの日も先着16組の親子  
(いずれの日も先着4～5組程度の親子)



## 「フリーデイ」について

保育園の支援センターを下記の日程で開放します。お好きな時間にお出かけ下さい。  
日時：9月25日(火)・9月26日(水)  
いずれも10:00～12:00  
※事前の連絡は必要ありません

## さんこう・ぽぽら開放の時間帯について

- 【開園日】  
○月～金  
(祝祭日・お盆・年末年始を除く)
- 【時間】  
○9:00～12:30  
・園行事の為、ご利用できない場合があります。  
・出前支援の場合は、担当職員が不在になります。
- 12:30～13:30  
昼休みの為閉園
- 13:30～16:00  
この時間帯のご利用の場合は、電話での申し込みをお願いいたします。

三光保育園：31-6877

## 寄稿：西九州大学・西九州大学短期大学部の窓から

子育てだより

「生活の中で、共に育つ」

西九州大学子ども学部心理カウンセリング学科 准教授 久野隆裕

私は、3月まで佐賀県立の特別支援学校の教員として29年勤めてきました（途中、教育委員会などにも勤めましたので、教員としては実質20年ですが）。

佐賀県立の特別支援学校の多くには寄宿舎があります。今は特別支援学校の数も増えましたが、以前は学校が少なく、その分1校の通学範囲が広がったので、通学に時間がかかることが多かったため、たくさんの子供たちが寄宿舎を利用していました。

特別支援学校には小学部・中学部・高等部があり、それぞれ小学生・中学生・高校生が学んでいます。最近では小学生で寄宿舎を利用する子は少なくなりましたが、以前は小学生もたくさん利用していました。4月の入学式は晴れの舞台。しかし、寄宿舎を利用する子供たちは、式が終わると、親元を離れた寄宿舎での生活がスタートします。小学部1年生にとっては、入学式の日が涙の別れの場面になることもしばしばでした。

知的障害のある小学部1年生は、発達段階が2歳から3歳ほどの子供が多く、まだ母子分離が十分できていないため、入舎当初は気持ちや行動がなかなか落ち着きません。ちょっとしたことで泣き出す子供も少なくありませんでした。寄宿舎指導員の先生たちも、落ち着かない子供に声をかけたり、一緒に遊んだりして対応されますが、そんなときに頼りになったのが、中学部や高等部の生徒でした。

生徒たちにも知的障害があり、言葉の理解や数の計算が難しいなどの困難のある子供たちですが、小さな「弟」や「妹」にぴったり寄り添って、寄宿舎の日課の活動を一緒にやってくれるのです。食堂では食事の配膳や食器の片付け、食事が終われば歯磨き、夕食後の自由時間にはプレイルームでボール遊びをしたり、談話室で一緒にテレビを見たり……。高等部のお兄さんの膝の上にちゃっかり座ってテレビを見る小学生の姿もありました。こうした生活が続き、5月の連休が明けるところから泣いている子はほとんどいなくなってきます。

彼らの姿からは、決して焦ることなく、小さい子のペースで関わることの大事さが読み取れます。寄宿舎は集団生活で、日課やルールもありますから、大人はどうしてもその流れに左右されがち。しかし、中学部や高等部の生徒たちは、ゆったりと関わります。

また、生徒たちは小学生に「〇〇しなさい。」「〇〇しないとだめだよ。」などと強制するようなことを言いません（元々、言葉で表現することが苦手な生徒たちですから、自然とそうなったのかもしれませんが……）。その代わりに、淡々と自分のすべき日課をこなし、小学生にその様子を見せています。少しずつ小学生たちも、それを真似するようになります。異年齢の子供たちが共に生活する中で、年長の子がよいモデルや手本となって年下の子を導く社会が自然に出来上がっていました。

一緒に同じことをやりながら、傍でさりげなく支える生徒たちの姿に、見習うところ、気付かされることがたくさんありました。あの頃の生徒たちに負けないよう、共に活動しながら、寄り添う姿勢を忘れずに子供たちと関わっていきたいと思います。

食育だより

「幼児にこわい熱中症」

西九州大学健康栄養学部 草野洋介

長年長崎の大学にいましたが4月より永原学園の一員となり、西九州大学で「解剖生理学」や「内科学」を担当しています。

今年は史上最高とっていい猛暑で、私の担当分野においては熱中症の救急搬送や死亡が話題になりました。

熱中症の危険性が高いのは急激に気温が上がり、暑熱順応ができていない7月、特に梅雨明けですが、まだまだ暑い日が続きます。特に幼児においては汗腺をはじめとする体温調節機能が発達しておらず、高齢者とともに注意が必要です。

熱中症には1. 大量に発汗して脱水により血液量が減少し、循環障害が生じ、虚脱状態となり（熱疲労）、意識を消失（熱失神）する熱虚脱、2. 発汗が著しく、急激に水分と電解質（特にナトリウム）が失われ筋肉が痙攣する熱けいれん、3. 高温環境下で体温調節ができなくなり、熱を放散できなくなって体温が41℃以上に上昇して発症し中枢神経が破壊され死に至る熱射病があります。

熱射病に至る前の対応が重要となります。幼児の熱中症の発生場所で最も多いのは自宅、次いで道路、公共の場所、幼稚園、保育所の順になっていますから保護者の日常生活における予防、発症した場合の熱射病に至らないようにする対応が重要となります。

予防においては適切な室温の管理、外出時には水分だけでなく電解質を含んだ給水、帽子の着用が重要ですが、特に身長が低い幼児においては高い路面温度の影響受けやすいので注意が必要です。

熱中症の危険信号は高い体温、赤い・熱い・乾いた皮膚、まったく汗をかかない、頭痛、めまい吐き気、意識障害ですが、もし発生した時は症状に応じての対応が必要です。まずは涼しい環境に避難させ、熱を放散させるために服を脱がせ、動脈が露出している首のくぼき部、わきの下、頸部のみならず全身の冷却を行うと同時に胃の表面で熱を奪うため冷たい飲み物（経口補水液やスポーツドリンク、水1リットルに1-2gの食塩水）を補給します。しかしながら幼児は急変が起こりうるため「呼びかけや刺激に対する反応がおかしい」「自力で水分の摂取ができない」などの状態になったときには緊急で医療機関に搬送することが最優先の対処法となります。

幼児の親世代が育ったころと比べ高温化（地球温暖化、ヒートアイランド現象）が進み、かつての常識が通用しないくらい幼児の熱中症のリスクが高まっていますので早めの対応が必要です。